



※野外センターのじゃぶじゃぶ池付近より、雪の御嶽山を望む。(1月16日撮影) →つれづれの「れ」の上方です。

豊田市総合野外センター
令和2年1月20日 26号

六所つれづれ

令和2年、穏やかな年明けとなりました。本年も、どうぞよろしくお願い申し上げます。
雪なし、氷なし。そんな年末年始となりました。と、思っているうちに松の内や成人の日も過ぎ、一月も後半にさしかかりました。冷ゆることの至りて甚だしきときなれば也、と称されるように、間もなく一年でいちばん寒い時期になります。暖冬のまま春を迎えるのでしょうか。それとも、冬らしい気候が巡ってくるのでしょうか。
今号では、『山の子里山学級』のようすを中心に、野外センターの活動状況を紹介します。

山の子里山学級

年末の21日に薪入れ、火入れを行った「山の子里山学級」。いよいよその成果を確かめる日になりました。そして、山の子里山らしい数々の体験をしました。その一端を紹介します。

果たして炭は…、でき具合は…



火入れからおよそ三週間、いよいよ釜の扉を開きます。固唾を飲んで、その瞬間を迎えます。しっかりと炭になっているでしょうか。はたまた、灰と化しているか。扉を開けた瞬間の中のようなすです。前回、職員のみで実施したときと同じ。釜口から少し後退していますが、しっかりと炭の姿が見えます。大成功です。

さて、次は、釜の中の炭を外へかき出す作業です。釜の内と外に分かれ、それぞれ作業に取り

組みます。そして、かき出した炭をトタン板にのせて、広場へ運びます。



広場では、早く、早く炭を待ちかまえます。



広場でいったん下ろされた炭は、計量され、袋詰めされます。

この一連の作業、場所と分担を入れ替え、参加した子どもたちの協力ですめられます。作業開始からおよそ二時間、薪入れに始まった炭焼きの完了です。全員の気持ちがかもった炭は、子どもたちが持ち帰ります。そして、残りの炭は、春から始まる新年度のキャンプ生活で使わせていただきます。山の子里山の成果は、次のキャンプ活動につながっていきます。

よい思考は、よい行いにつながる

- 「よい考えを思い浮かべること、よい行いをするに通じます」
 - 「昨日の自分と今日の自分を振り返ることは、自分の成長を知ることにつながります」
- 二日目、「里山体験」で高月院を訪問させていただきました。楽しいゲー

ムや活動の後、お話をうかがいました。その中で、心に残ったおことばです。



野外センターの周辺は、自然環境のみならず、歴史と伝統の宝庫です。先人の考えや、その道の専門の方からのお話を聞くことは、里山のよさを知り、自然のすばらしさを実感することにつながると思います。

思い出や学びを文字に…書き初め

二泊三日のまとめです。この間に見たこと、聞いたこと、考えたことなどを振り返り、「ことば」に集約。それを大きな紙に、大きな筆を使って書き初めに取り組みました。グループ内で心に残ったことはどんなことか、それをことばに表現すると、どんな内容に

なるか。次の写真は、その取組の様子です。



六つのグループは、こんな文字に表現しました。

令和元年度 山の子里山学級 令和2年1月11日(水)~13日(月)



それぞれに三日間の思いがこもり、個性あふれる作品が仕上がりました。

焼き上がった炭とともによい思い出、よい体験として、ふるさとや里山を大切に思う心につながっていくことを願います。ふるさとや里山は、次の世代に受け継がれていきます。

再掲—冬季作業

野外センター名物の冬季作業については、これまでもたびたび紹介してきました。本号でも、その一端をお伝えしたいと思います。



はじめに、この写真の作業です。おわかりに



なりますか。

そうです。テントの張り替

えです。年中、暑さ・寒さの中、風雨の中をしっかりと耐えてくれたテントです。長年の使用により、出入り口のファスナーや窓の一部が壊れます。テント補修専門の店に依頼し、補修が成ったテントが届きました。

テントの上には、丈夫なフライシートがかかっており、テントとともにいったん撤去します。風雨に強いテントゆえ、生地も丈夫で、その分ずいぶんな重量です。声を掛け合い、交換していきます。

4月から始まるキャンプでは、以前にも増して快適なテント生活が送れる



ものと考えています。次の1枚は、薪割り作業

のようすです。昨年末のファミリーサイトの樹木伐採

でできた木を薪割り機で割っていま

す。丸太を割き、適当な太さにします。この薪は、炭の材料となります。

野外センターでできた薪は、釜で燃やされ、炭となります。ちなみに、山の子里山で使った薪も、この作業でつくり出したものです。自給自足という大げさなことではありませんが、自然の恵みを有効に使うという考えの基で取り組んでいるのです。

年が明け、ようやく…

冒頭にも書きましたが、ほんとうに暖冬です。昨年の寒さがありません。冬は、どこへいってしまったのでしょうか。

「冬、暖かい」

これは、利用の方々にとっては、いかがでしょうか。真冬の時期を迎えても、10度以上の気温があります。ダウンの上着を着ていると、汗ばむほどです。火を扱う取組では、一枚上着を脱がないといけません。

1月も後半に入って、ようやくマイナスの気温になりました。そして、水たまりに氷が張り、霜柱が立つようになりました。

野外センターは寒い、冬の生活がたいへんだ、雪が多い、通勤に苦勞する、そんな鉄則や確信が揺らぎ始めているように感じます。

冬の六所には「厳しさ」が似つかわしいと思う反面、この先の気温の低下も気がかりとなる日々です。

魂知和

学生の頃、アルバイト先の主人がやたらと「どうも」を使っていた。それが、微笑ましかった。しかし、「どうも」の後に続くことばはない。それでどうしたんだ、の疑問は残ったままである◆店の客に「どうも」、得意先に「どうも」、慶弔の場面でも「どうも」。TPOも何もない、相手も関係ない。いついかなる場合も「どうも」で通した人だった。しかし、その表情や仕草からは、感謝や祝福、ときに弔慰の意が感じられた。人柄がなせる技だった◆ずっと以前、教科書に「言葉の力」という教材があった。その一節。「言葉というものの本質が、口先だけのもの、言葉だけのものではなくて、それを発している人間全体の世界を否応なしに背負ってしまっているところにあるからである。人間全体が、ささやかな言葉一つ一つに反映してしまうからである」◆論説文は、染織家との出会いで、美しいピンク色は山桜の樹皮から取り出す事実を知る、という話に続く。そして、『言葉の一語一語は桜の花びら一枚一枚だといっていい。一見したところぜんぜん別の色をしているが、しかし、本当は全身でその花びらの色を生み出している大きな幹、それを一語一語の花びらが背後に背負っているのである』◆先の主人が背負ってきた人生、その集約が「どうも」であり、聞く人はそれを受け止めていたのだ。